

これからの社会科教育

*
篠原 昭雄

教育の改革や改訂の動きの中で、社会科教育は、いま大きな転期に立たされています。小学校低学年における生活科や、高等学校における地歴科と公民科の新設による実質的な社会科解体を含め、社会科教育の本質にかかわることが厳しく問われています。そこで、ここでは、これからの社会科教育の在り方について、4頁に亘る資料（省略）をもとに、三つの側面から考察してみます。

1. 社会科の変遷からその在り方を考える

社会科の教科構造や科目等の構成は、教育課程の改訂が行われるたびに様々に変化してきました。しかもその都度、社会科とは何かが問われ、幾つかの解体の危機にも遭遇しました。それだけでも社会科の性格の複雑さやコンセンサスの得難さが想像できます。

発足以来40年、社会科は、その基本的な性格や教育内容をみると、その時々 of 社会的な背景や要請を強く反映するとともに、教育現場での指導上の問題や教育思潮などによって揺れ動き、力点を更新しながら今日に至っています。しかしこれまで、社会科の性格や統合の原理である社会と人間に関する多面的・多角的考察と総合的な認識（総合性）、及びそれを通した公民的資質の育成という二つの柱については変わっていません。40年の社会科教育の実践・研究と発展は、まさにそれぞれの時期の諸条件に対応しつつ、前述の二つの柱の示す趣旨実現の方途を模索してきた歴史であります。

問題解決学習を主軸とする初期社会科の特色と意義、昭和30年代の系統学習への転換、教育の現代化期に成立した昭和40年代の社会科の特色、そして、人間化への要請や資源・環境、国際理解の重要性の認識を求めた現行の社会科などの特色は、それぞれどのような社会的背景や要請、教育思潮のもとで成立してきたか。それを振り返って考察することは、これからの社会科の在り方を考える上で不可欠のことのように思われます。しかも、これからの社会は、変化の一層激しい社会です。こうした社会に生きる人間には、何が具備されなければならないか。そのために社会科教育には具体的に何が求められるか。社会科教育の変遷の中からそれを探るとともに、その考

* 筑波大学教育学系

え方に立って "二十一世紀の社会科" を創造することこそ肝要と考えます。

2. 改訂の方向からみた社会科教育の改善

資料には、昨年12月の教育課程審議会の答申に示された "改善のねらい" と "社会、地歴、公民" 科の改善の方針とその具体的な事項を掲げました。まず改善のねらいでは、「……次の諸点に留意して行う必要がある……」として、(1)豊かな心とたくましく生きる人間、(2)自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力、(3)基礎的・基本的内容の重視(精選)と個性を生かす教育、(4)国際理解と我が国の文化と伝統の理解という四つの項目を、しかも各項目とも相対応する事柄を、それぞれ並列的に示しています。これは前回の答申とは大きく異なっています。前回の答申では、「…次のようなねらいの達成を目指して…」として、豊かな人間性、自ら考え判断できる力の育成、国民として必要な基礎・基本と個性の重視、それらの実現のための徹底した精選によるゆとりと充実" という、学校教育の目指すビジョンが明確であった、今回のにはそれがありません。それはなぜか。これからの学校教育は、四つの配慮事項をもとに創造していくものであると私はとらえます。つまり、今、教育で、例えば二十一世紀を目指して、どういう教育が必要なのか、それを基本的な方針としてかかげて、具体的にそれではどうあればよいのかということを教課審の委員だけではなく、まさに国をあげてそれを創造していく時じゃあないかと、私はそのように思います。

ですから社会科教育についても、前述の配慮事項と具体的にどうかかわるか。それをよく吟味してみると、社会科教育と密接に結びつくもの、社会科教育において実現すべきものが極めて多いように思います。これからの社会科教育の在り方は、このような視点でとらえる必要があると考えます。

3. これからの社会科教育に求められるもの

答申で特に目につくのは、"社会の変化" なかでも "国際化" に対応する社会科教育の在り方が求められている点です。社会科に関する改善の方針には随所にこの文言がみられます。そのために高校社会科を解体して「地歴科」と「公民科」に再編するということについては、素直に首肯できませんが、むしろ逆行ではないかと思いますが、……(中略)…それはともかく、これからの社会に対応する社会科を構築することが重要な課題であることは言うまでもありません。そこで、ここでは(1)社会の変化に主体的に対応できる力をつける社会科教育の在り方、及び(2)個性を生かす社会科教育(個別化への期待)という二つの側面から考察します。

(1)では、社会の変化とは具体的に何であり、それに主体的に対応できる能力とは何かを明らか

にする必要があります。中教審、臨教審、教課審など諸種の答申では、前者は科学技術の進歩、産業構造の変化、情報化、国際化、高齢化、家族構造の変化などにとらえ、後者は、思考力、判断力、創造力、情報処理（選択・構成）能力、表現力、自己教育力、国際理解の精神などとしています。社会科では、現実の社会的事象を直接の学習対象にしています。したがって、これらの変化に関する内容は、社会科の内容と深くかかわっています。各学校・学年段階で、具体的に教育内容としてそれらをどのように取り入れるかは、社会科教育の重要な課題であります。能力は、それらの教育内容の根幹をなすものです。それぞれの教育内容のどこで、どのような能力を育成するか、具体的に構築することこそ求められます。

(2)では、集団指導（学習）の場である学校における社会科の学習指導において、具体的にどのように個を生かす（個別化）教育を実現するかということです。これからの教育にはこのことが特に求められています。もちろん個別化の必要性は教育の基本であり、教育の機会均等とか公教育という面でも求められてきました。ところがとするとこの考え方に立つ個別化は、結果の個別化つまりそれだと差別になりかねないので学習の結果をみんな同じように揃えるという考え方に陥りがちでした。これからの教育に求められるものは、子どもの内在的なものの個別化です。それが今なぜ必要か。新たな創造をしていかなければならない時代の教育は、画一的な一斉授業はふさわしくない。また、変化の激しい社会に生きる子どもにとって社会的事象に対する見方や考え方を身につけたり、学習意欲を喚起させたり、そして自らの生き方を考えたりする力は不可欠です。それは一人一人を生かし、或いは自らが生きる教育、個別化教育によって培われてくる力、創造的で主体的に考え判断できる力、そういった学力が求められるわけです。それを社会科教育においてどのように実現するか、個人差が大きく、社会科嫌い（ばなれ）や社会科学習における「つまずき」が指摘されている今日、社会科教育のリザーレクションを目指した研究と実践こそ、これからの社会科教育に特に求められることと考えます。

高校社会科の科目構成について

— 現行教育課程における選択制の可能性と問題点 —

橋 本 克 己^{*}

1. はじめに

現行教育課程が実施され、10年近くが経ようとしている。多くの学校では、教員構成と旧課程系統学習に生かされていた科目間の相互補完性を尊重する観点から、安易な選択制を導入せず、

* 都立白鷺高等学校